

普及ノート

奈良県のダリア — 球根・切り花・苗生産への取り組み支援 —

普及技術課 花き指導係 藤井祐子・有馬 毅

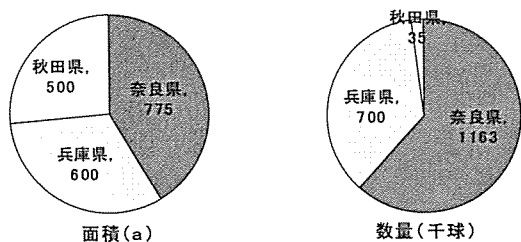
1. ダリア生産の歴史と現状

奈良県におけるダリアの球根生産は、県北東部に位置する宇陀市および山添村を中心に行われている。球根生産の歴史は古く、山添村では、1925年頃、商社がオランダから輸入した球根を、敷島農園の城戸芳友氏が栽培したのが始まりとされている。戦時中、一時中断したものの、1951年頃から生産を再開し、球根の輸出も盛んに行われていた。現在、山添村では、主に勝原、三ヶ谷地域で約25戸の生産者が球根養成を行い、国内種苗会社に出荷している。

一方、宇陀市榛原(旧 榛原町)では、1950年、木田農園(奈良県橿原市)からの委託を受け、球根生産を7名で始めたのがはじまりとされている。翌1951年には、榛原ダリア耕作組合を設立(組合員数約60名)し、球根からの養成による生産が拡大した。1955年には榛原ダリア組合(現、榛原花卉組合)を結成し、1960年～1975年頃にはアメリカへ輸出もしていた。現在、榛原花卉組合は組合員数19名、組合保持品種は約350品種(主要200品種)となっており、組合員のうち、6名は球根だけでなく、6月下旬～11月中旬に切り花を出荷している。

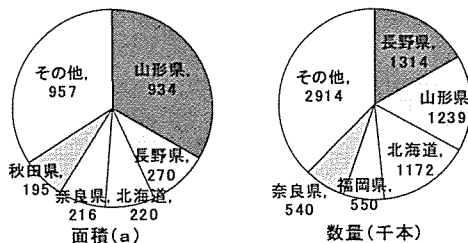
榛原および勝原、三ヶ谷地域では、生産される過程で品種育成も盛んに行われてきた(現存するもので約50品種)。県内生産者が育種した代表的なものに、‘榛原の里’、‘祝舟’、‘美榛’や、極小輪のわい性種‘トップミックスシリーズ’がある。

2008年に奈良県が行った全国のダリア球根と切り花生産調査によると、球根生産を行っているのは、奈良県、兵庫県、秋田県の3県が上位を占めており、



第1図 ダリア球根生産の作付け面積および出荷数量(2008年産、奈良県調べ)

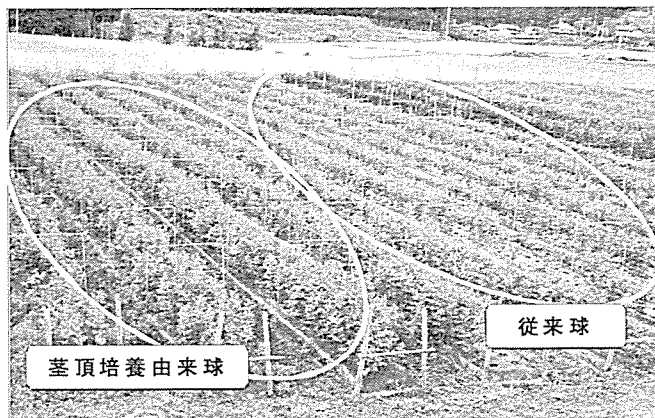
特に奈良県は作付け面積・出荷数量ともにトップの産地となっている(第1図)。また、切り花は、第2図に示されている都道府県で生産されている。



第2図 ダリア切り花生産の作付け面積および出荷数量(2008年産、奈良県調べ)

2. 球根生産量日本一産地の危機

このように奈良県の地域特産物ともいえるダリア球根だが、近年、生産現場では球根のウイルス汚染による生育不良、球根収量の減少が大きな問題となっていた。そこで、農業総合センターではウイルスに汚染された球根を茎頂培養し、そこから得られた株(茎頂培養株)を用いて挿し芽増殖する技術を開発し提案した。第3図、第1表にみられるように、茎頂培養された球根を用いることで、従来球根に比べ欠株率が減少し、切り花の生育が旺盛になることが明らかとなった。そこで、榛原花卉組合では、5年前よりこの茎頂培養株を用いた挿し芽増殖技術に取り組み始めた。現在、いったん茎頂培養した品種



第3図 茎頂培養によるダリアの生育改善(品種‘祝盃’)

(従来の球根に比べ、茎頂培養株から増やした球根を用いると、生育が格段に良くなる。)

はウイルスによる再汚染を防ぐため、網室ハウス内で親株を保存，更新するなど，第4図に示したようなくみで種球生産を行っている。

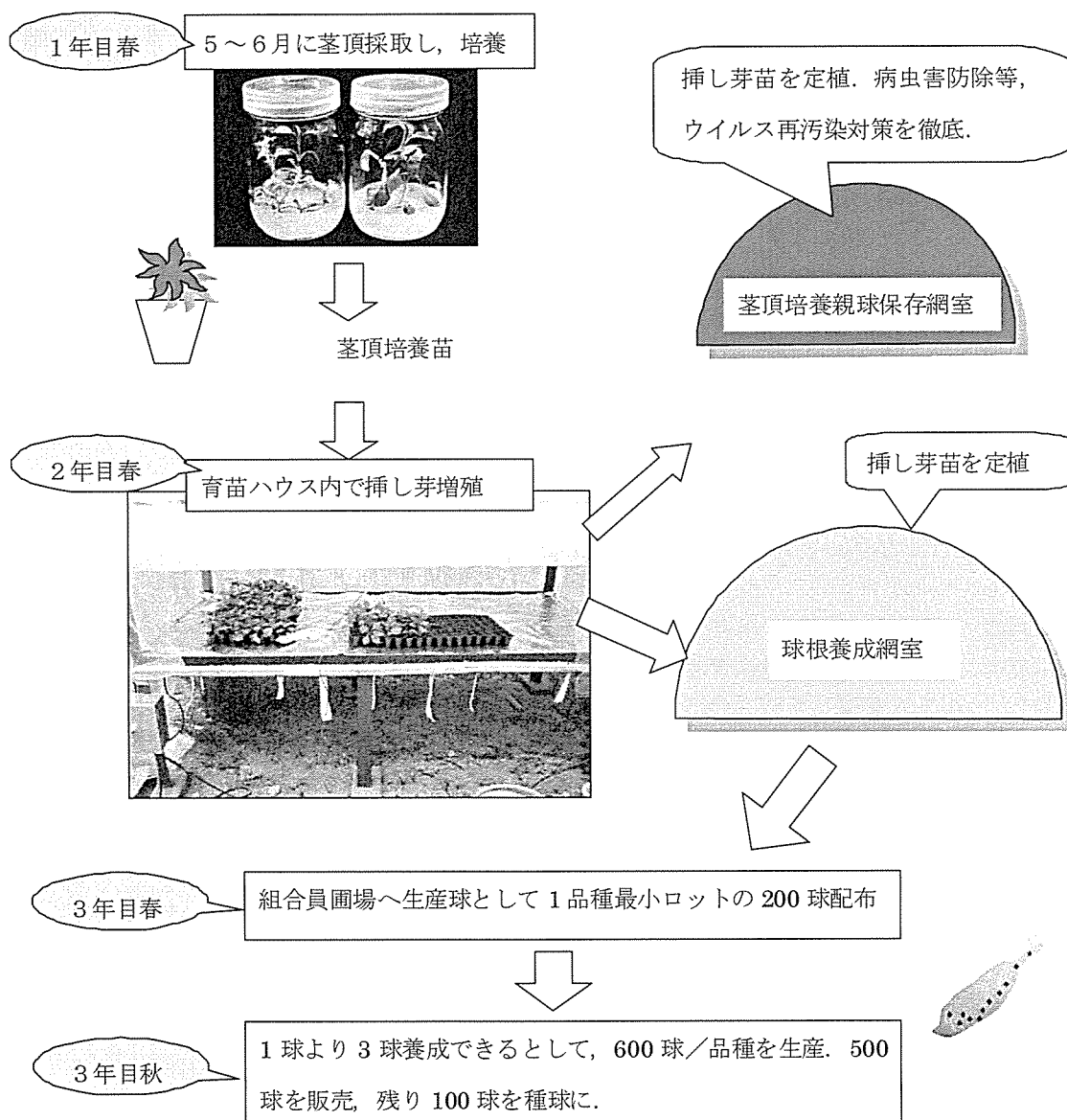
第1表 茎頂培養によるダリアの生育改善効果

品種名	欠株率 (%)	最大切花長 (cm)	節間長 (cm)	ウイルス発症率 (%)	
ソフトムード	茎頂培養由来球	5	95	16	5
	従来球	63	72	13	25
モナコS	茎頂培養由来球	3	113	16	5
	従来球	13	97	14	15

調査個体数は1区20株

3. 新技術導入による球根の生産安定と産地のさらなる発展へ

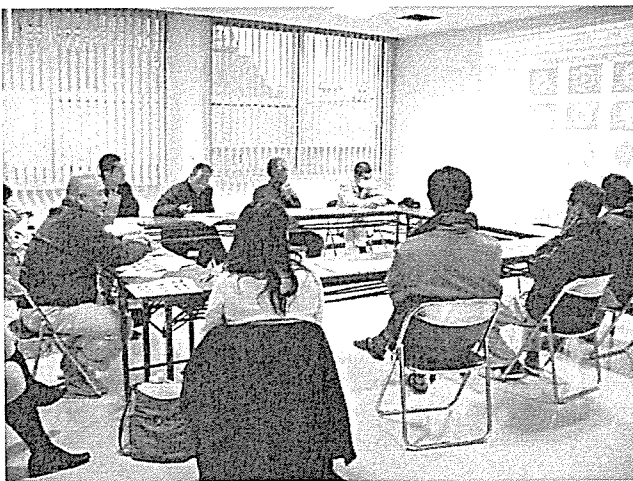
県内の輪ギク生産を主体とした産地である葛城市においては、これまで冬季の補完作目として栽培されてきたチューリップ等の球根切り花の販売単価が低迷し、新しい冬季補完作目への転換要望が高まりつつあった。全国的にも冬切りダリアの需要が高まる動きが背景にあったことを見すえ、葛城市の生産者に冬切りダリア生産の導入を勧めるとともに、榛原花卉組合には、茎頂培養株を用いた挿し芽増殖技術を利用して冬切り生産用のセル苗を生産すること



第4図 榛原花卉組合におけるダリア茎頂培養苗を用いた球根増殖のしくみ

を提案した。2009年には、榛原花卉組合が生産した冬切り生産用セル苗を葛城市の生産者に販売供給する体制を整備した。冬切りダリアの生産を普及していくため、県内に豊富なダリア品種が保有されている利点を生かし、これまで明らかにされていなかった冬切り品種特性や、効率的な電照方法を研究部門と連携して解明、得られた試験データをもとに、地域に適した品種を選定し、高品質で安定した栽培のための技術支援を行っている。2010年、2011年の春には、普及技術課が中心となってJAならけん、中部農林振興事務所と連携しながら、冬切りダリアに関心のある生産者に呼びかけ、現地圃場見学と研究部門からの品種特性試験結果報告を含めた栽培検討会を実施した(第5図)。現在、葛城市内では、施設を用いた切り花ダリアが4戸で生産され、11月中旬から6月にかけて出荷されている(第6図)。さらに、榛原花卉組合では冬切り生産用セル苗以外に、一般消費者向けポット苗も、種苗会社の通販アイテムとして契約生産、出荷している。

また、2010年からは、今まで農業総合センターで実施していた茎頂培養から順化までの工程も榛原花卉組合で実施できるよう、茎頂培養技術習得のための研修や施設設備への導入支援を行ってきた(第7図)。2011年現在では、榛原花卉組合として茎頂培養設備を整備し、生産者自ら茎頂培養苗の生産に取り組み始めている。



第5図 冬切りダリア品種および栽培検討会

4. まとめ

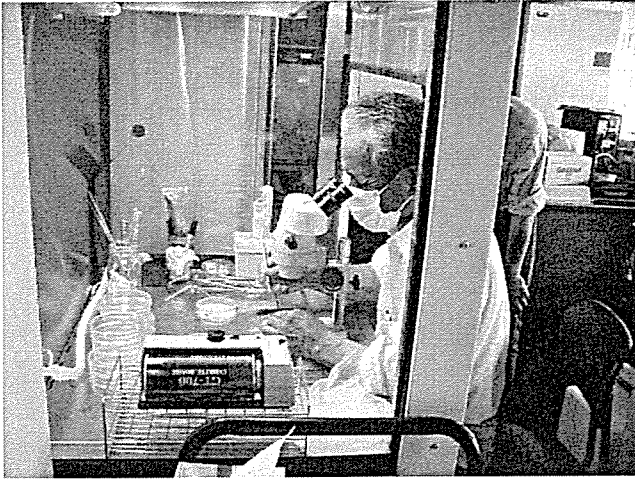
切り花としてのダリアは、チューリップ、ユリなど他の球根花き類や、切り花生産上位3品目であるキク、バラ、カーネーションに比べると生産量が少な

く、花き類の中で決してメジャーな品目であるとは



第6図 葛城市での冬切りダリアの生育と出荷箱の様子

いえない。しかし、球根としてのダリアは、奈良県の中山間地域である宇陀市、山添村の主要な転作作物の1つとして長く生産されてきた品目であり、第1図の統計でみるように、全国的にも奈良県特有の地域特産物と位置づけることができる。また、数多い品種は長期間にわたり地道な生産体制の中で受け継がれてきた貴重な遺伝資源でもある。ところが、一時は60名いた榛原花卉組合の組合員も、現在では3分の1に激減し、高齢化により平均年齢が60歳を超えており、現状のままでは産地の維持が厳しい状況にある。最近の榛原花卉組合が取り組んだ茎頂培養を利用したセル苗生産は、この部分だけの実施を考えると採算をとることは難しい。しかしながら、ここまで組合が取り組んでこれたのは、豊富な品種を維持しながらの球根生産体制が基盤にあり、ウイ



第7図 茎頂培養技術習得のための実習

ルス対策としての茎頂培養が必要であったこと、茎頂培養された苗の網室による維持や増殖体制の整備が組合として可能であったこと、さらに、冬切り用のセル苗生産は、球根の安定生産のために用意した設備や技術が流用可能であったことの3点が主な理由となっている。生産者の高齢化などを考えると、現時点でダリアの球根産地が将来的に生き残っているための基盤を作っておく必要があり、今回の取り組みはその第1歩である。

幸いなことに、昨今、ダリアの切り花は、昔からの仏花・お稽古花としてだけではなく、中大輪系を中心にブライダル需要として人気が高く、市場での切り花取扱量が年々増加している。そうした時代の

流れも背景に、長年つちかかってきた球根生産の基盤と新技術を組み合わせ、球根・挿し芽苗・切り花生産における、奈良県ダリアのブランド力強化への産地の取り組みを今後も支援していきたい。

引用文献・参考資料

1. 奈良県農林部農業水産振興課. 2009. 平成20年産 全国のダリア球根生産作付け面積及び出荷数量、生産戸数等について.
2. 奈良県農林部農業水産振興課. 2009. 平成20年産 全国のダリア切花作付け面積及び出荷数量、生産戸数等について.
3. 西田尚子. 2010. 奈良県におけるダリア栽培の歴史. 日本ダリア會 會報第6号:15-16
4. 藤井祐子. 2011. 奈良県のダリア 球根・切り花・苗生産への取り組み. 日本ダリア會 會報第7号:17-18
5. 藤井祐子. 2011. 奈良県のダリアー球根・切り花・苗生産への取り組み支援一. 農業総合センターニュース第139号:1